

沖縄の歴史を知るための10冊

高良 倉吉(琉球大学名誉教授)・選

『南島考古入門』 沖縄考古学会編 (2018) ボーダーインク

四十年ぶりに沖縄考古学会が「考古学の成果を市民のなかへ」というスローガンのもとに執筆された沖縄考古学の最前線の書であり、普及書の決定版。沖縄考古学会の総勢 70 名が書き下ろした充実の内容。



南島考古入門

『琉球の時代—大いなる歴史像を求めて』

高良倉吉 (1980) 筑摩書房

中国、マラッカやポルトガル等、海外の文書に記された当時の琉球王国の姿を文献資料から読み解き、沖縄独自の文化と世界像に新たな光をあてる一冊。



琉球の時代

『新装版 海の王国・琉球』 上里隆史 (2018) ボーダーインク

歴史家・上里隆史が描く、国境を越えた「海域史」という視点からの琉球王国の形成と展開の歴史。港湾都市として栄えた那覇を中心に活発に展開された交易ネットワークを捉えた新たな琉球史研究。



新装版 海の王国・琉球

『琉球王国—東アジアのコーナーストーン』 赤嶺守 (2004) 講談社

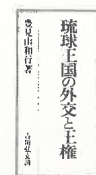
海の通商王国＝琉球。その繁栄の糸口は明の倭寇対策にあった。交易を担う華僑たちの実像や中国進貢の旅の様子など、史料を駆使し、新たな琉球像を提示する。



琉球王国

『琉球王国の外交と王権』 豊見山和行 (2004) 吉川弘文館

1609 年の薩摩藩による琉球攻略から 1879 年の明治政府による琉球処分まで、王国独自の政治外交と王権の特質に迫る。近世の琉球王国を前近代における国家の一類型とする注目の書。



琉球王国の外交と王権

『近世琉球と中日関係』 渡辺美季 (2012) 吉川弘文館

近世の琉球は、日本と中国の狭間にあって、どちらにも包摂されない特異な地位を維持した。その外交実態や意識構造を探り、琉球固有の歴史的意義を東アジアの国際環境の中に位置づける意欲作。



近世琉球と中日関係

『眉屋私記』 上野英信 (1984) 潮出版社 (復刊 2014、海鳥社)

やんばるの屋部村、眉屋一門の 150 年を通し、名も無き人々の生き様、歩みから近代沖縄の姿を描き出した。上野英信が沖縄からメキシコまで 10 年の取材を通して書き上げた記録文学。



眉屋私記

『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』

沖縄県教育庁文化財課史料編集班編 (2017) 沖縄県教育委員会

これまでの沖縄戦研究の成果をまとめる一方、いままであまり取り上げられてこなかった「障がい者」「ハンセン病者」「戦争トラウマ」「不発弾」などの分野にも光をあてた沖縄戦研究に新たな視点を開く一冊。



沖縄県史・各論編第6巻
沖縄戦

『戦後沖縄経済史』 琉球銀行調査部編 (1984) 琉球銀行

1945 年から 1972 年までの米国統治下の経済政策を中心に、沖縄経済をまとめた大著。琉球銀行の創立 30 年記念事業として出版された。



戦後沖縄経済史

『沖縄現代史 米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』

櫻澤誠 (2015) 中央公論新社

広大な基地を抱えて復帰した沖縄の戦後 70 年の道のりを、政治・経済・文化と多面的に捉え、その複雑な歩みの歴史的背景を読み解く視点を提示する。



沖縄現代史